

同居人の視点 壮さんの シェアメイトから見た シェアハウスの実験

文：高林洋臣

秋から、自分の生活拠点と行き来しながら、久保田壮さんのシェアメイトとして過ごしてきた佐藤航也さんとタカハシ 'タカカーン' セイジさんに、シェアハウスでの生活について話を伺いました。前日に熱を出したため、アルス・ノヴァを休み、シェアハウスのリビングで家族の迎えを待っていた壮さんも同席することになりました。



左から航也さん、タカハシさん、壮さん

シェアメイトになった 背景と関心

航也 去年の4月末に、レッツが行なっている「タイムトラベル100時間ツアー」の参加者として来ました。ガイドダンスでは、「ケアは一方的な関係ではなく、お互いにする・されるの関係がある」とか、「建物の中だけで完結せず街全体を施設として捉える」という話を聞きました。散歩に行きそれを現場でも体験できて面白かった。障害をテーマにした自分の研究に行き詰まっていたこともあり、ここで働くことにも興味があった。6月に

再び訪れたときに、レッツ代表の久保田さんから、3階のシェアハウスでフィールドワークしながら住んでみたらどうかと提案があって住むことになりました。研究に関連して、壮さんと生活をともにすることで、社会や障害について考えられたらと思って。あと、自分の進路について考えたかった。

タカハシ 7月に静岡県掛川市で仕事があったついでに、レッツに寄ってみました。久保田さんといろいろ話して、その帰りに、シェアハウスでの滞在を提案され

た。「いるだけでよければ本望です」と、その場で依頼を受けました。最後に展覧会をやるとか映像作品にするとか、決め打ちでかかるのは嫌なんです。昔、芸術と福祉のプロジェクトをやっているとき、耳の聞こえないアーティストに「障害のある人と暮らしたことがないくせに、あだこうだ言いやがって」と、SNSで間接的に非難された。それもあって願ったり叶ったりだなと思いました。

高林 タカハシさんは、障害に関係なく「すごす」こと自体に関心がありますよね。

タカハシ なんて人は何かをしなければ評価されないのか、生産的じゃないと人にあらずみみたいな言説が溢れているんだらうと強く疑問に思っていた。その不安を解消するために専門的な技術を身につけたりするけど、それって人間的じゃないなと。まず、その人が居ることが肯定されたら安心するし、その安心から創造が生まれるべき、というか安心だからこそ創造的になれるんじゃないかと。

高林 壮くんがシェアハウスでの生活を始める前、10月に京都市立芸術大学のシンポジウムに出席することになり、タカハシさんも同行しました。大阪に住んでいるのに前日に新幹線で浜松に来て、車で京都まで行き、シンポジウムに参加して一泊。翌日、京都観光してから浜松に戻り、その後、再び大阪へ帰りましたね。

タカハシ 最初は京都合流の予定だったけど、スタートをともにしたことで道中レッツの職員たちとも仲良くなれた。泊まった時にはむちゃぶりで、俊介くん(アルス・ノヴァの利用者)と風呂に入って、いきなり裸の付き合い。シンポジウム後に、近くのびっくりドンキーで打ち上げをして、ノンアルコールでテンション上がる感じが、大円団を迎えたなど。壮くんも幹事みたいに立ち上がっていました。

高林 それでシェアハウスで壮くんと一緒に暮らすこ

とについてどう思いましたか？

タカハシ いけるだろうなと。夜中に、同行したマッスルさん(アルス・ノヴァの職員で壮さんのヘルパーでもある)と、例えば「よだれって生理的に嫌なときと、明らかに見えるときがあって不思議だな」という話をしました。今は気にならなくなったんですけど、そういうことを確認できて面白かった。

同居人という 立場のバランス

高林 京都出張後、壮くんは週末を実家で過ごし、週明けからシェアハウスに引っ越しました。航也さんは初日から居たんですよ。生活が始まってどうでしたか？

航也 最初はヘルパーさんの介助を手伝いながら、壮さんと関わりを持つとしました。それ以外の関わり方が分からないし、レッツのスタッフから、人によって介助方法が違うと聞いていたので、それを学んでみたいなど。

高林 ヘルパーさんは日によって来る人が違う一方、航也さんは毎日現場にいるので、まだ壮くんと関わり始めたばかりなのに、いろいろ聞かれることが多かったそうですね。

航也 最初はスタッフだと思われ、いろいろ聞かれて、分かることは答えるようにしていました。タイミングを見て、自分はスタッフではなく住んでいるだけだと伝えなければ、立場は揺れて、トイレ介助することもあったり。最初の頃は、全体が慌ただしい雰囲気だった。

高林 住むだけとは言いつつ、一方でシェアハウスの日常の記録をお願いしていました。その記録の扱いについて悩みましたよね。ヘルパーさんと壮くんの関わりが記録されていて、それをレッツの人が確認して、ヘルパーさんにクレームが入ったら、同居人としての立場が

変わってしまうことが気になっていた。

航也 関係者が情報共有するLINEグループで、久保田さんが親として心配なので、「大丈夫ですか?」とか「こうしてほしい」というメッセージを頻繁に送っているなかで、自分の記録が久保田さんの目に入ったらどうなるのだろうと心配でした。

高林 航也さんの記録は、プロジェクトの記録としての使用に留め、親である久保田さんに共有するのは時差を設けることにしました。

タカハシ 同居人がチクリ役になるのは違う気がして。まわりはみんなレッツの人たちで、他の事業所のヘルパーさんは立場弱いじゃないですか。

高林 一方で、壮くとヘルパーさん2人だけだと、どうしてもヘルパーさんの立場が強くなってしまふ。ヘルパーさんの都合でことが進んでしまうかもしれない。

航也 一応その2つを意識して、バランスを取りながら過ごしていました。

高林 住み始めて1週間くらいしたときに、大型の台風が浜松に直撃するというので、壮さんの帰省に航也さんも同行しましたよね。

航也 そこで久保田さんとの心理的な距離が縮まりました。あと、壮くんの実家での様子が比較材料として手に入りました。実家では、扉のガラスが取れていたり、壁に穴が空いていたり、戦いの歴史が印象的でした。庭をぐるぐる歩いて過ごせるんだとか。リビングで皆と一緒に過ごす様子は、家族らしい風景だなと思いました。

高林 久保田さんから、壮くんがイベントに外出する際に一緒に行ってくれませんかとお願ひされることもありましたがね。ヘルパーさんも壮くんと関わり始めたばかり

なので、1対1の外出だと不安だろうなというのもあったので。

航也 久保田さんからの提案があったのはイベントの開始時間の直前だったのですが、ヘルパーさんと相談して「行くしかないでしょ!」と行きました。音楽のワークショップだったんですけど、行く前は僕もヘルパーさんもどきどきしていましたが、参加してみたら、壮くと一緒に自分たち自身も楽しむことができました。

シェアメイトとヘルパーのコミュニケーション

航也 ヘルパーさんとは、楽しく、よいかたちでコミュニケーションできている印象です。壮くんの生活という共有するテーマを通して話したり、協力したりすることで距離が縮められてきたかなと思います。食事の取り方など壮くんの具体的な生活のことや、「壮くんの意思をどう尊重するか」ということも、ヘルパーさんと話をしました。さらにヘルパーさんたちが、それぞれどんな仕事をしてきたかとか、個人的な話もできて面白かった。

高林 ヘルパーさん本人は、仕事の関係で支援会議には参加できず、直接コミュニケーションを取れるのが、現場に入ってもらっているときだけなので、その声をひろってくれる航也さんは、ありがたい存在でした。

航也 僕は日々の壮くんの様子の変化を見ていたり、レッツのスタッフとも壮くんと関わりについて話をしていたので、それをヘルパーさんたちに伝えることができました。

高林 ヘルパーさんと個人的な話ができたとのことで、一般的にヘルパーさんが仕事の役割を下ろして、一人の個人として現場にいることは、なかなかないことだと思います。仕事だから一線を引く。個人的には、3階で食事会とかしているときに、ヘルパーさんも同席してくれると嬉しい。その方が、壮くんも居心地がいいと



社さんに餃子を食べさせる航也さん

思うんですよね。同居人としてはどう思いますか?

航也 一度ヘルパーさんと一緒に餃子をつくって、壮くんも一緒にご飯を食べたことがありました。食べ始めてしばらくして、壮くんの機嫌が悪くなってお皿を投げられちゃったんですけどね。餃子を一緒につくっているとき、ヘルパーさんとの距離が縮まったのを感じました。「サイズ大きめですね」とか話しながら。昨日も同じ人だったんですけど「一緒に暮らしている仲ですからね」と何気なく言ってくれたのが嬉しかった。あと、ヘルパーさんがお刺身を買ってきて、タカハシさんも一緒に食べながら話したことがあって、そのときはここに暮らし始めてから「シェアハウス感」を初めて感じたときだったなと思います。

タカハシ シェアハウスが始まったばかりで、ヘルパーさんも場所をまだ使いこなせていないとき、料理中に壮くんがキッチンに入ってくると危険だからと、ゴミ箱でバリアードを作っていたことがありました。本来、壮くんも住人なんだから入れない場所があると不公平じゃないかと、モヤッとして、ヘルパーさんには話さなかったけど、ゴミ箱をそっと元に戻しました。あと、包丁がキッチンに普通に置いてあるのは素敵だなと思って。道具のひとつだから。

高林 壮くとヘルパーさんの振る舞いを見て、自分

だったらこうするなと思いますよね。そのことをヘルパーさんと話しますか?

タカハシ それは微妙ですね。絶対こっちの方がいいとは言えない。でも、ヘルパーさんが、壮くんがご飯を食べてくれないことで悩んでいたときに、「単純にお腹が空いてないんじゃないですか?」とか、待ってみようというニュアンスのことを言ったことはあります。あと、女性の非力そうなヘルパーさんが、リビングで寝てしまった壮くんをひとりで抱えて部屋へ運ぼうとしているときに、「足のほう持ちましょうか」と手伝うこともあった。

航也 最初は聞かれるままに話していたけど、口を出さずに任せてみたり、いろいろな立場を意識しつつ試しています。ただ、今でも新しいヘルパーさんが入ったり、何かあると相談を受けることはある。

高林 それが、シェアメイトがいることの、ヘルパーさんにとってのメリットだと思います。ヘルパーさんはひとりで支援に入ることが多く、研修で教えてもらっても、いざやってみると分からないことが多いはず。他のヘルパーさんのやり方も見ているシェアメイトに相談できることは助かると思う。壮くんの支援記録を書いてもらって共有しているけれど、細かいことまで書けないので。

航也 ヘルパーさんから「シェアメイトが居てくれて安心です」と言ってもらえることがあります。ヘルパーさんが何か困ったことがあったときに、支援記録を見直してもそれについては書かれていなくて、相談されることもあります。

高林 航也さんが居なかったら、壮くんのここでの生活は成り立ってなかったと思う。

航也 役に立てていたら嬉しいし、僕は積極的にやっていますが、誰もが積極的に関わりたいとは限らないとも思う。

高林 役割があったからできた部分もありますね。シェアメイトが1人だと大変だけど、2〜3人いれば負担感が分散されるので、別の感じ方をするのもかもしれない。

航也 昨夜は、高林さんとササキさんがシェアハウスと一緒にいて安心感があった。この安心感があれば、壮くと一緒に遊びに行くとか、もっとポジティブな方へ考えがいきそうですね。

壮さんに揺さぶられる生活と自分のペースの生活

高林 10月末に航也さんとタカハシさんの滞在が重なって、同居人が2人になりました。

航也 それまでは壮くとコミュニケーションを取りたいということもあって、壮くんの生活を中心に考えていて、自分がこう暮らしたいとかはあまり考えていなかった。タカハシさんが来て、「朝寝てるときに掃除機の音がうるさかった」とか言っているのを聞いて、自分の暮らしもここにあって、それを大切にすることも大事だと気づかされました。

高林 タカハシさんは、素の自分でしようとするのは意識的にやっているんですか？それとも自然に？

タカハシ 両方ですね。シェアハウスの同居人の設定だからスタッフ間のグループメッセージに入らなかったり。演じている部分も、根拠は素の自分。中立的な自分という存在を意識しました。意識しなかったらもっと壮くんの支援に巻き込まれていたと思う。

高林 シェアハウスが壮くん中心になっていて問題に感じたことは何ですか？

タカハシ 初対面の航也くんが疲れているように見えました。自分は同居人という仕事を担っているけれど、夜は落ち着いて過ごしたかった。航也くんとじっくり話

をしているときも、ヘルパーさんが何の気もなく「あれどこですか？」とカットインしてくるのは、人として変だなと思って。ペースを乱されるというか。人情かもしれないけど、それに応えちゃう航也くんがいて、壮くんの支援に巻き込まれているように見えた。ここはシェアハウスだと聞いているから、壮くんだけの家じゃない。壮くんのペース、ヘルパーさんのテンションしかないと思う。短期的に我慢して乗り越えることはできるけれど、我慢することがあまり必要に思えなかった。

高林 航也さんは、タカハシさんが来る前に居づらいなど感じたことはありますか？

航也 ヘルパーさんから、壮くんの介助を要求されている空気を感じたことがあって、その時は隙を見つけて、僕は仕事ではなくプライベートで住んでいると伝えました。でも手伝えることがあれば、手伝いたい気持ちもある。それから、その人はなんとなく配慮してくれるようになった。あと、個人的には、よだれとか、リビングでのオムツ交換とか、衛生面は気になるタイプではないけど、気になる人はいるだろうな。

高林 タカハシさんが、滞在当初、壮くん中心の生活を受け入れようとして、「壮くんのことを大家さんだと思えばいい」という話をしていました。壮くんは、勝手に個室のドアを開けてチェックしてくるし。

タカハシ 大家さんなのかお父さんなのか。お風呂が一番風呂だし。100%受け入れることもできるけれど、シェアハウスの可能性を広げる実験なので、それだと面白くない。一方で受け止めまくって、自分の生活や価値観が変わっていく可能性もある。両方同時に考えながら滞在しています。

高林 ここに住もうとする人は、揺さぶられたくて来るんだと思うから、自分が居心地よく過ごすためだけにいるわけじゃないですね。

航也 閉じて安全なだけの生活より、開いて変化する生活のよさもありますね。

シェアハウスでのヘルパーの振る舞い

タカハシ 本当に人の振る舞いって多様だなと思う。ヘルパーさんはそれぞれキャラが濃いし。一人一人とのコミュニケーションが成り立つのかなと。2回目の滞りの際、ヘルパーさんのリビングでの仮眠問題に悩みました。それで、勇気を振り絞って言いましたよ。「自分は夜型なので、もし部屋が空いていたら、そこで休憩してくださいね。夜中急に料理したくなって、起こしちゃ悪いし、起こしていいと言われても気が引けるんで」と。1人目は「夜型なんですね」と理解してくれて部屋で寝てくれた。次の人にもこの調子で言ってみたら、「私はリビングが大好きなんで、ここで寝るのがいいんです」と。そう言われたら、それは受け止めよう。その通りにならなくても言ってよかったな。

高林 でも、日々入れ変わるヘルパーさんと毎回話さないといけないのが大変だと言っていましたね。

タカハシ 貼り紙するのも違うと思うし。久保田さんが洗面所に「節水」って貼っていたけど、結構ダメージを食らうじゃないですか。「言われなくてもわかってるよ」と思っても目に入ってきて、向き合えないといけない。貼り紙は対話的じゃなく一方的だし。昨日のヘルパーさんは、僕もシェアメイトとして居ることを認識した上で行動してくれていると感じました。「ここで壮くん着替えていいですか」と聞いてくれたり。テンションも高くないし、急に入り込んでくることもない。まさに対話的だった。

高林 ヘルパーさんは仕事モードで来るから、ずっと掃除していたりするのがここでの居場所のつくり方なのだと思う。

タカハシ 壮くんのことはそんなに気にならないし、ここにいて自分のことや福祉やケアについて考えちゃうのは、しんどくてもいいんだけど、ヘルパーさんとの折り合いというか、それぞれの居方が違いすぎることに悩みました。ヘルパーさんが同じ空間に居る感じがしない、場を一緒に作ってくれない感じで、僕は疲れてしまう。でも、そもそもヘルパーさんはシェアハウスで仕事をした経験はなかったらうし、壮くんのお世話をするテンションでやってくる。僕も張り付きでそこにずっと居る訳じゃないし、仕方ないな。

高林 ヘルパーさんがずっとお世話しているモードだと、壮くん本人もずっと見られていて疲れるだろうなと思う。

タカハシ 仕事だからそういう振る舞いになる可能性が高い。ヘルパーさんがお刺身を買ってきて一緒に食べたときのように、普段と同じように居てくれたらどうなるだろう。

航也 それはヘルパーさんの個性や性格にもよると思う。壮くんと距離を適切に取ろうと意識してというより、「やること終わったし、自分もゆったりするか」と、仕事からちょっと外れるときがある。人によっては、食事、お風呂、服薬はしっかりやるけど、それが終わったら距離を取ってひとりであることがあります。



スタッフに悩みを相談するタカハシさん

高林 わりとそういうタイプの人とのほうが、壮くんはちゃんと食べたり寝たりしている気がする。ヘルパーさんがずっとそわそわしていると、何かトラブルが起こる。

航也 不思議とそういうヘルパーさんのときは、ちゃんとご飯食べてますね。ただ、壮くんの調子がよければ、自分のペースで居られてよくても、壮くんの興奮が続いたときは、その距離感がちょっと心配になりました。状況によって変化することが求められる。でも基本的には、距離を取ったほうが、壮くんは安定して幸せそうです。

介助が必要なメンバーが増えるとどうなるか

高林 壮くん以外にも、アルス・ノヴァの利用者が、自立生活の実験でここに泊まっていました。

タカハシ それぞれのヘルパーさん同士が交わる光景を見ることができた。舞さん(アルス・ノヴァ利用者)のヘルパーさんなんて、初日だから研修のためにと熱心に3人くらいで来て、人口密度が上がって、壮くんのヘルパーさんが迷惑そうにしていたり(笑)。

高林 ちょっと引いて見られるようになるんですね。登場人物が増えることで、巻き込まれ度が低くなるというか。

タカハシ そうだね。前は自分に向けられていた眼差しが、他の人に向く。

航也 僕の場合は、ヘルパーさん同士のコンフリクトは感じなかった。むしろヘルパーさん同士の助け合いが見えた。「壮くん、水飲みたそうだよ」と教えていたり。自分がキッチンを使っているときに壮くんが入ってくると、ひとりだと「お皿大丈夫かな」とか心配になるけど、人数が多かったのも、むしろ壮くんの存在感を楽しく感じました。

高林 今後、ヘルパーさんの介助が必要な人がもうひとり住むことになったら、どうでしょうか？

タカハシ 面白いと思う。事業所を越えて交わることになるでしょ。

航也 生活基盤となる安定した体制ができれば、スムーズに行くのでは。仕事の分担とかが上手くいかないとストレスかも。

タカハシ 「こういうことがあったら、どっちの責任になるの?」ということを気にしていたヘルパーさんもいました。それも含めて、ヘルパーさん自身が自問していくのはよいことだと思う。

高林 一方で、単純に人数が増えることで気が休まる部分もあるだろうから、ありがたい方が多いんじゃないかな。あと、舞さんが体験宿泊で来たときに、航也さんが執着されていましたね。

航也 舞さんのヘルパーさんが離れて、僕と2人だけになったときに、ここのものを持って帰りたい舞さんにいろいろお願いされた。そのコミュニケーションを味わおうとずっと付き合ってた話していたら、急に舞さんが玄関にダッシュして「散歩に行くー!」って叫び出した。

高林 舞さんから見て航也さんは優しそうに見えて、言うことを聞いてくれると思ったけど、あまり期待に応えてくれなくて怒ったのかも。ヘルパーさんという監視者がいない間に、何か持って帰ろうと思ったのか。支援者以外の人に関わることで、普段とは違うことが起こるのは、本人にとってよいことだと思う。

シェアメイトの自治と壮さんの意思確認

高林 シェアハウス感を出すために、レッツがイベントを仕掛けることができました。食事会を開催したり、



取材を受ける3人

レッツの忘年会をここでやったり、あとは、イベントのゲストが宿泊するときに懇親会を開いたり。

航也 住んでいる立場としては、楽しい面と疲れる面の両方あります。レッツに関心のある多様な人が来て、ご飯を食べながら様々な話ができるのは、刺激的だし考えが広がる。タカハシさんと出会えたこととか。すごくありがたい経験をさせてもらっているなど。一方で、疲れていて誰とも話したくないようなときは、上手く抜け出して個室で耳栓して過ごしていたり。レッツのスタッフが「住人なんだから休みたいときは休んでいいよ」といつも言ってくれていたのも、ありがたかった。

タカハシ 今は実験中なので、住人に許可を取らずともイベントをぶっこんでくるのはいいと思う。今後シェアハウスとして稼働してからも、住人と一緒にアレンジすればいいと思う。住人が企画してやれるのが理想的。今度こんなゲストが来るから暇なら一緒にご飯食べようかと。そういう順序を踏めたらいいなと思う。

高林 生活のことやイベントの企画などについて、シェアハウスの住人同士で話す場があるといい。特別に場を設定せず、日常会話の延長でいいんだけど。そのときに壮くんの意思をどう確認するかという問題があります。壮くんのヘルパーさんとも調整しないとイケないとなると、どうしても仰々しくなり、気軽に事を起こすことができなくなる。

タカハシ 話したとしても、壮くんは言葉でのコミュニケーションはとりづらい。

高林 簡単なことは本人にも確認できます。ここで一緒にご飯食べていいか、とか。でも本人に確認しようがないことも多い。例えば、シェアメイトが友人を呼んでパーティするとして、壮くんがOKするのか。つまり、それが壮くんにとっていいことなのか判断しないとイケない。判断するために、実際にやってみて、本人がよいと思うのか、それともストレスフルに感じるのか反応を見るのもありだと思う。

(壮さんがテーブルを叩いて声をあげる。)

タカハシ 「俺の話をするな」と言ってるよ。以前、子どもがいる前で、親同士が、冗談なんだろうけど子どもの悪口を言い合うのを見て嫌だなと思った。支援の場でも、悪気はなく本人の目の前で普通に情報共有しますよね。

高林 シェアハウス住人のヒアリングだから、壮くんの話も聞かないといけない。

タカハシ 壮くん、今日は熱が出たから3階でまったりしているけど、こういう日があってもいいよね。眠そうなら、朝9時に無理に下のアルス・ノヴァに行かなくてもいいのに。

高林 日中活動の生活介護を利用せず、24時間重度訪問介護を利用する方法もある。でも、壮くんにとって、それが幸せかと考えると、そうではない気がします。本人が好きなことだけしてストレスなく過ごすことが、いい人生だとは思えない。アルス・ノヴァに行って、他の人と交流して、いろんな体験をすることも大事だと思います。

タカハシ 重度訪問介護を使って、外部の人としてアルス・ノヴァに遊びに行くこともできるんですね？

高林 できます。それなら外出したいときに外出できて、昼間眠くなってたら自宅で寝ることができる。

(壮さんが手を叩いて喜ぶ。)

高林 「いいじゃんそれ！」って言っているのかな(笑)。今流れている音楽が好きなだけかもしれない。

タカハシ 他人のことなんてなかなか分からないですからね。

高林 壮くん本人の意思が分からないから、どこかにお伺いを立てないといけないわけじゃないし、「やめて

おきました」ということばかりでは、関係性として健全じゃない。シェアメイトという関係があるのだから、「自分が判断してこうしました」というのもあっていい。壮くんがお菓子食べたそうだから自分のお菓子をあげるとか。床は汚れるかもしれないし、夕飯が食べられなくなってしまうかもしれない。でも、そういうことがあった方が生活は豊かだろうと思う。

タカハシ ヘルパーさんが間に入ると、もちろん安心だけれど壮くんと関わるシーンが少なくなります。関わるのは、壮くんがコップを持って水を欲しそうにしているのをヘルパーさんが見ていなくて、「水要る？」って確認するときくらい。

(壮さんがコップを持ってくる。)

高林 これは完全に「水を飲みたい」ですね。ここで住み始めてから要求がはっきりしてきました。アルス・ノヴァでご飯食べる時も、昔は食べたくないと弁当箱を投げていたけど、最近は「要りません」と静かに首を振ることが多い。コミュニケーション力が上がってきて、こう反応すれば分かってもらえるというのが、実体験として分かっているのかもしれない。さっき、壮くんが自室から出てきたとき、つい迎えに行こうとしてしまったけど、来るのを待っていてもいいんだよね。先回りしすぎちゃうと、壮くんが意思を表して分かってもらったのを実感する機会を奪ってしまう。

タカハシ 壮くんが食事中に立ってしまったとき、ヘルパーさんはだいたい「こっち来て座って」と言うじゃないですか。でも食事中に立ってはいけない根拠はない。そのまま出かけて気付いたら散歩になっていてもいい。でも、今はヘルパーさんが交代するタイミングがあるから、出かけたくてもそれまでには戻ってこないといけないのが難しいと思う。

航也 壮くんの生活は日々変化している気がします。時期によって、日中アルス・ノヴァから3階の自宅に戻ろう



ヒアリング当日、リラックスした様子の壮さん

とすることがあったり、母親を見たら追いかけていったり、落ち着いているときがあったり。一貫したイメージはないかな。これは僕の解釈なんですけど、最近たけくんは壁側を向いて過ごすのが多かった気がする。でも、今はこっち向いてるから、ちょっとリラックスしていると思う。

ヘルパー研究所としてのシェアハウス

高林 シェアハウスの体制立て直しのため、一時期、週2～3日程度、レッツのスタッフが管理人として泊まり込んで、対応しました。ただ、今後、管理人という仕事を設けるとしても、その人件費はどこから出すのかという問題があります。

タカハシ 常駐の管理人がいるとたぶんいいよね。どんな役割を担うかによるけど、無料で住めるだけで、来たい人はいると思う。

高林 ここで過ごしてよかったことも聞いておきたい。今後ここに住もうと思う人にアピールできるような。

航也 いろんなヘルパーさんやゲストが来て話ができること。壮くんがここにいることで、お互いの関心をゼロから探らなくても、壮くんのことを一緒に話したいという気持ちになりやすい。重度の知的障害のある人の生活を一緒に体験できて、考えて、話して、人と出会える。

タカハシ ヘルパーを1回経験してみたい気持ちになりました。楽しそうだなと。人の生活にもともと関心があったので、他人の生活を見て「こんなに違うんだ」と

か「一緒じゃん」という多様さを見られるのはメリット。アルス・ノヴァでも日中活動は見られるけれど、それは日常の一端であって、それ以外は意外と知る機会がなかった。ヘルパーさんが日々入れ替わるので、いろんな支援や関わりが一挙に見られる。壮くんも日々身体は変化するし、我々もそう。単純にヘルパー研究所みたいで、暮らしながら泊まりながらのナチュラルなテンションで見られる。

高林 生活を支えるヘルパーの研修として、こうしなきゃいけないと教えられるよりも、バリエーションを見られるのは大事ですね。それをヘルパーとか福祉に関心がない人にも体験してもらいたいが、ハードルは高いと思う。

タカハシ ついつい「障害者」って一括りにしてしまう。そうじゃなくて、ここは自分も含め個別的な生き物として存在している場所だからこそ、より自分の価値観に引き寄せて考えて、その延長線上で福祉や支援を目の当たりにできる。壮くんと最初に京都で泊まったときも、別に普通だなと思った。自分は特に支援しなくてもいいという立場の気楽さのおかげで、わざとらしくなく友達になれる可能性が高まるんじゃないかな。わざとらしい関わり以外のあり方があるということを実際に知れたことが、僕にとってとてもよかった。

高林 やっぱり、「障害者」と関わりとなると謎のフィルターがかけられますしね。お互いに「心の庭いじり」ができる仲になれるのかどうか。

タカハシ 僕の昨日の名言を使ってますね。次の事業名にでも使ってください。

【日時】2020年2月28日[金] 11:00～13:00
【場所】たけし文化センター3階シェアハウス リビング
【対象】佐藤航也(千葉大学大学院)
タカハシ 'タカカーン' セイジ(だんだん施設になるセンターをつくらうとしている人)
*プロフィールは69ページ参照
【聞き手】高林洋臣(NPO法人クリエイティブサポートレッツ)